

# 教育実習Ⅰ（幼）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 講師 上村加奈

## 1 はじめに

本学において幼稚園教諭一種免許状取得を希望する学生は、教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを段階的に学修する。教育実習Ⅰの履修前に、選択科目である教育実習Ⅶをほとんどの学生が履修するため4段階の学びとなっている。教育実習Ⅰは学内での学修を基本とし、幼児教育の基本にもとづく実践力を養成することを目的としている。続く幼稚園における実習となる教育実習Ⅱを見据えている。そこで、授業のねらいを教育実習Ⅱに臨む前に、教育実践力を培うとしている。

培う力として、①保育の基礎理解・子ども理解②保育指導案を立案する力③教材研究をする力④保育を展開する力（子どもの様子を観察し、実態把握をする力・子どもの実態に応じて働きかける力・集団と個人に対応する力）⑤基礎技能の5点を挙げている。

## 2 実施のスケジュール

15回の実施内容を一覧表にして次に示す。

授業回	授業内容
第1回	オリエンテーション（教育実習Ⅰの位置づけ 授業のねらいと概要・実習資格）
第2回	指導案立案の要点 模擬保育Ⅰの指導案の内容（6月の指導計画から考える）
第3回	指導案の立案と書き方（プレゼンテーションによる話題提供 意見交流） 指導案検討
第4～8回	模擬保育Ⅰ（3・4・5・歳 各2回） 指導案検討（4回）
第9回	模擬保育Ⅰのまとめ 模擬保育Ⅱに向けて（年間指導計画から考える） 指導案検討 教育実習Ⅱに向けて
第10～14回	模擬保育Ⅱ（3・4・5・歳 各2回） 指導案検討（2回）
第15回	教育実習Ⅰのまとめ 教育実習Ⅱに向けて

## 3 活動の概要

オリエンテーションの後、授業全体を3部構成にして、指導案の立案と書き方、模擬保育Ⅰ、模擬保育Ⅱとした。オリエンテーションでは、教育実習の学びにおける、教育実習Ⅰの位置づけを示した。教育実習Ⅱを見据えて、実習資格を意識して学修姿勢向上に取り組むように指導した。

### ①指導案の立案と書き方の学修

既存の知識を基に、指導案の立案と書き方の要点を学修する。立案した指導案をプレゼンテーションして質疑応答や意見交流をすることで、具体的な事項の理解を図った。2年前期までの学修を基に、子どもにとっての遊びの意味を考えながら指導案を作成する。書き方としては幼児教育課程論や保育

課程論の授業の学びと関連させて、段階的に学修できるようにした。(教育実習(幼稚園)の概要と課題をご参照ください)

## ②模擬保育Ⅰ

教育実習Ⅱの実施時期である6月の指導計画を基に指導案を立案した学生が保育者役となり、他の学生が子ども役となって模擬保育を行なう。模擬保育の後に協議会をもち、実践の振り返りをした。保育者役の立場からと子ども役を演じることで、子どもの視点での意見交流を行った。対象年齢を3・4・5歳児とした。保育者役の学生は、年齢と月の子どもの実態を描きながら指導案を作成する。子ども役の学生は、事前に配付された指導案を読み、対象年齢の子どもをイメージして子ども役として活動する。

## ③模擬保育Ⅱ

実施方法は、模擬保育Ⅰと同様である。変更事項は、模擬保育Ⅰの学びを踏まえ、年間指導計画を基に、実践したい月を決めて指導案立案に取り組む。授業後には、学びを振り返って改訂指導案を作成する点である。

# 4 成果と課題

## 1) 成果

### ①指導案立案と他の授業との連携

他の授業と連携して学びに連続性をもたせることで理解の差が減少し、子どもの発達理解や教材研究の理解が深まった指導案となっていた。さらに、作成した指導案で模擬保育に取り組むため、遊びを充実させるためには教材研究が重要であることを、体験を通して理解していた。

### ②保育のつながりを理解

保育課程に基づく年間指導計画、月の指導計画をもとにした指導案立案を課せられたため、手掛かりを見つけようと読み込もうとする姿や発言が聞かれた。前期に履修した、教育実習Ⅶの学びから、時間経過の中で育ちを捉えたことの効果もあると考える。実習で見る保育の一場面が、繋がった保育の一部であるとの前提で臨むことが出来る意義は大きい。

### ③振り返り

模擬保育Ⅰのまとめでは、実際に指導案を立案していることと、グループメンバーの指導案5作からの学びがあるため、指導案を比較したり模擬保育を体験したりした気づきや疑問からの、具体的な質問が多かった。全員で考えることで思考の過程も分かり、納得する姿が見られた。教員も、学生の疑問や理解しにくい事項の実態が分かった。子どもの実態として、望ましい姿に視点が当たりがちなることを学生が気づいた。子ども役をすることや教員が演じる子ども役に戸惑いながらも、子どもの理解力や行動特性に気づいた。

模擬保育Ⅱでは、子どもの心情を考えて多様な姿を描こうとしていた。

## 4) iPadの活用

指導案プレゼンの資料をiPadで確認できるようにした。電子資料にすることで、作成後速やかに履修学生全員に配付することができ、事前学修の時間を確保することができ、質問内容を考えてくる姿が見られた。

## (4) 課題と今後の取り組み

2年次の学生の実態として、遊びを考えるときの発想のしかたが固定化する、型にはまった遊び方や遊びの展開を考える傾向にある。この段階で40分の指導案を考えるという取り組みでは、これらの学生の実態に留意しながら指導する必要がある。

授業のねらいとして、保育の実践力を身につけることを設定している。初めての模擬保育ということで、学生はかなり緊張している。求められる実践力が意識できるように、今年度からルーブリックを導入した。授業担当者で検討して、学生にとって分かりやすく、自己評価しやすいものとなるように改善していきたい。